

教養ある女としてのフィリスの限界

Cousin Phillis における病と身体

金丸千雪

序

Elizabeth Gaskell の『従妹フィリス』(“ *Cousin Phillis* ”、以下『フィリス』) は、1863 年から翌年にかけて *The Cornhill Magazine* に連載された。この時代、工業に能率の高い機械や動力が導入されて、生産力が急激に増大してきている。こういった変化は人びとの日常生活に直接影響を及ぼす。この小説は、田園生活の平和な「旧世界」と産業社会の到来を告げる「新世界」が向き合った時間を、年若い Phillis Holman の心の成長を交えて詩情豊かに描き出している。田園育ちのフィリスは、青年鉄道技師である Edward Holdsworth に心を惹かれるが、彼女の想いは無に帰する。鉄道に代表される新しい産業時代を生き抜くホールズワースは、高名な技師 Greathed の依頼でカナダに渡り、そこで別の相手と結婚してしまうのだ。フィリスの失恋の痛手は大きく、またそれが次から次へと重大な心理的衝撃を彼女に与える。フィリスはやがて病気になり、危うく死にかける。しかし、ホールマン家を取り巻く人びとの善意に囲まれて、フィリスは回復する。フィリスの新しい人生の出発を読者に予感させて、この物語は終わる。美しいフィリスの物心両面に及ぶ成長や、精神的自立への彼女の決意を論じようとする、ホールズワースは悪者になるだろう。教養があり、繊細なフィリスと、彼女の心を傷つけたホールズワースという構図が出来上がれば、『フィリス』は読み易くなるかもしれない。しかし、Gerin は「ホールズワースを悪人とするのは易しいが、ギャスケルはそうはしていない。」¹ という批評をしている。Stone によると、ホールズワースは “an unconscious villain”² である。小論もこれらの意見を支持しながらも、フィリスの周囲に配置されている家事使用人の Betty の愛情深い助言に注意を払った読みを試みてみたい。すると、教養のある女としてのフィリスの限界が見えてくる。

実際、フィリスが身に付けた教養を生かす場は『フィリス』では与えられていない。そこには、社会の厳しい現実が映し出されている。同時に、固体の生命と種の保存の必要に駆り立てられて生活する場所で、真に活動的な、「働く身体」を持つ女性が持ち上げられているからではないだろうか。そうすると、『フィリス』は Ward が言う「家庭的な魅力」³をもった小作品でありながらも、単に青春期の恋愛物語としての興味を読者にかきたてるのではなく、より重要なモチーフを土台として濃密なリアリティを浮かび上がらせている。その際、軸となるのが、以下で詳述する病と身体である。

まず、物語に偏在する病についての叙述に注目する。次に、病に関する叙述と並んで、小説で多用される身体の描写に焦点を移し、身体が抱え、身体が出会う実存的な課題との関係を明らかにする。フィリスの身体描写とホールズワースとの恋愛との接点を検討し、そこから考察を派生させ、ひとつの人間身体が、労働と権力と基本的にどのような絡み具合をしているかを探ってみる。本稿が目指すのは、自己と他者との新たな関係を構築するにあたって、言語を超えた身体性が、この作品でいかに重要視されているかを検証することである。

フィリスの恋愛

フィリス・ホールマンが失恋した鉄道技師ホールズワースは、この小説の語り手である Paul Manning の上司である。ホールズワースもポール・マニングも、Camus が指摘するように、‘the positive male characters in Gaskell’s novel’⁴、すなわち階級を超えて公共の利益のために仕事をする青年たちである。ところが、この活動的なホールズワースが、長期間の微熱が続く病気で寝込んでしまう。ロンドンで結婚している姉が看病に来なくてはならないほど、彼は衰弱してしまい、その状態は、“... he was very ill for many weeks, almost many months;...”⁵という具合である。その後、ホールズワースの体調は、かなり良くなっているが、依然として彼はポールとの健全な共同生活を共有できないでいる。そのことをポールがホールマン牧師夫妻に話したことから、夫妻が管理する Hope Farm にホールズワースは滞在することになる。ホールズワースは「口数も少なくなり、少し動いただけでも消耗して何をするにも決めきらない」(255)ののだが、ポールの采配で彼の Heathbridge への療養が実現する。

都市の生活に疲弊したホールズワースの身体を癒し立て直すには、空気の良い自然に恵まれた環境が必要だと、ホールマン夫妻が考えた結果である。なぜホールマン夫妻が、ホールズワースの苦悩を受け止め支えようとしたのか、『フィリス』では直接に説明されていないが、読者には推測ができる。ホールマン夫妻は無情にも、わが子の死に遭遇している上、夫人の姉は肺病で亡くなっている。彼らは自分たちの悲痛な体験を通して、人間の身体的な苦悩に深い想いを寄せるに十分な同情心を持ち合わせている。ここには、ギaskellが自分自身の家庭からの同情を押し広げて、人類全体を一つの家族として見ようとした思想⁶の一端が認められる。こうして、固定した場所には落ち着かないホールズワースと、都会の喧騒とは無縁である、田園育ちのフィリスとは接近する。ホールズワースの身体の異変が彼に無為を強いなければ、競争社会でめまぐるしく活躍する彼が、平穏なヒースブリッジの村に避難を求めるはずもない。

この出会いから両者の関係は発展するのだが、両者を結び付けるものに、分かち合える知的生活があったことは重要である。「どんな私的な話題よりも本のほうに興味があるように話す」(244) フィリスは、当時の女性にしてはめずらしく、ラテン語とギリシア語に精通している。ホールズワースも外国語を修得しているのだから、二人の間には仲間とも言うべき親愛の情が湧いている。しかし、両者の決定的な違いは、フィリスのそれは教養の範囲に留まり、実際にその運用の場が与えられていない。言語能力が高いにもかかわらず、フィリスが習得している言語は、現実の生活上で何の役にも立っていない。それは、社会的生産活動というネットワークに組み込まれ、他人との交渉を持っているポール、ホールマン牧師、ポールの父マニング、そしてホールズワースとは対照的である。彼らには多くの込み入った問題が与えられて、彼らは規則を作り、指図し、彼の妻ないしは部下に説明し、かつ裁決する。彼らを取り入れつつある知識は、彼らの責任をさらに重くしている。ジョン・マニングはホールマン牧師と意気投合して、農具のことで意見交換をする。ホールマンの学問好きとマニングの独学は、彼ら自身の生活を向上させていく上で大きな力となっている。また、ホールズワースは身につけた外国語を通して、視野を広げて自己のキャリア向上に役立たせている。こういった点にRogersも注目して、「フィリスの学問への参加は、男性たちと異なり「相互的」(mutual)でない」⁷と述べている。

人は成長するにつれて、発展する余地を持たねばならない。ところが、フィリスは父親の言う 'her peaceful maidenhood' (307) に収まっている。例えば、ポールは十七歳のフィリスと始めて会った時、彼はフィリスが子供用の pinafore (エプロン) を身につけているのに注目する。その二ヶ月後、彼女は年齢に合った美しいエプロンに着替えているが、女性であるフィリスが活躍する領域は家事労働の場に限定されている。Stoneman が指摘するように、語り手ポールとフィリスは年齢も同じ、社会的階層も同じであるが、ジェンダーだけが異なるので、一方は独立した生活を営み、片方は親の庇護の下にある「子供」⁸ である。従って、フィリスが身につけた外国語の実力は優れているにしても、それは他者への影響力を持たない。彼女の知性が、報酬、威信、権力と結合する可能性はないに等しいことは、マニングの遠慮会釈のない皮肉、「家の中が一杯になるほど子供ができたらと、そんなものは忘れてしまっただろう」(252) から明らかである。そこには、子供の養育に関する雑事を女性のみを負わせる社会、女性を自立する人間として成長させないままでおく文化の一面が映し出されている。

となれば、フィリスが外国語の素養を少しでも生かそうとすると、彼女の教養を認め、理解し、それを高く評価できるホールズワースとの結婚が最適になる。ホールズワースは外国旅行の経験があり、イタリア語を流暢にしゃべり、文学にも精通している。二人の話の内容は教養の高いものになるに違いない。そればかりではない。彼は将来的に見て非常に有望な「鉄道」という産業に従事し、精力的に仕事をしているので、フィリスに安定した生活を保証できる。ヴィクトリア朝の女性にとっては、生存手段と考えられる結婚をすることが、主体的な力の獲得を可能にする第一歩である。美しく知的なフィリスと、有能なホールズワースとの巡り会い、そして男女の愛、結合というハッピー・エンディングが、当時の読者から求められるはずであるし、また彼らを満足させるはずである。しかし、作者はそのようなプロットを避けている。それは、フィリスが選ぶべき道はまた別にあり、そのために彼女自身の自己変革の必要性があることを示唆する。作者は『フィリス』において、我々が現状を乗り越えるためのヒントを何か与えようとするのである。

では、フィリスの恋愛を見ていくに当たって、着目しなければならないことは何だろうか。それは、フィリスの身体化された経験が、彼女のホールズワースへの

理解をより一層深め、ついにはホールズワースを愛の対象として見ていったことである。ここで、両者が言語を超えた身体性ともいべきものを共有した場面を、時間の経過の順に三つ挙げて、その内容の詳細を検討してみたい。

ポールとフィリス、ホールズワースが、農園で一緒にグリーンピース取りを行う場面がある。病気はホールズワースから活力を奪い、彼を臆病にしている。ホールズワースは少しでも体を動かしたくないためか、農園行きを躊躇するが、仕方なくポールに連れられて出かけて行く。そこで、病後で「働く身体」を持たないホールズワースは五分も仕事をすると、すっかり疲れた様子で“ I am afraid I must strike work. I am not as strong as I fancied myself. ”(260) とフィリスに訴える。ホールズワースは迂回的表現で、他者とは無関係な個別の身体活動をしなければならない自分の存在をフィリスに伝える。身体的地位の逆転がホールズワースとフィリスの力関係を均等にしている。フィリスは彼の青白い顔を見て、急いで彼を家に案内する。フィリスは顔を赤らめ、“ It was very thoughtless of me. . . . how stupid I was to forget that Mr. Holdsworth had been ill! ”(260) と反省する。病みあがりの人間の側に立った配慮ができなかった自分の非に、彼女は気づく。それは、女性を保護するという男性の優越性と、女性の従属性が逆転している場面である。

次の場面は、二人の内面には起こる感情が、言語と身体の関係から微妙に描き出されている。ある時、ホールマン家の人びとが畑仕事をしていると、土砂降り雨が降ってくる。激しい稲妻が辺り一面にくると、ホールズワースは無言のうち、しっかりと無防備なフィリスを守る。やがて、ポール・マニング、フィリス、ホールズワースの三人が身を寄せ合って雨宿りをする。フィリスは上着を脱ぎ、雨に濡れるホールズワースにそれをかけたいのだが、二人の真ん中に挟まれているので腕を動かさない。そこで、病後の彼の身体を気遣うフィリスは、その上着をホールズワースの両肩に軽く渡らせようとする。ホールズワースの優しさがフィリスの意識内に感情として受容され、その感情が彼の存在を包み込むという身体意識が表現されている。そして、その後の‘ In doing so she touched his shirt.’ (269) という説明において、フィリスは間接的ではあるが、身体の触れ合いを実感したことが明らかになっている。人々は通常、身体の接触を巧妙に避けている。だが、ここではフィリスとホールズワースとは、身体を通じて肯定的

に関わり合っている。二人の共通了解の地平には、言語の外側の領域があることが把握できる。

さらに、ホールズワースが美しいフィリスを写生する場面において、両者を隔てるものではなく、その身体距離が縮まっている。ホールズワースは、豊作の女神ケレス（Ceres）のように髪を垂らしたフィリスのスケッチ画を描く。そこには、女性の身体的な特徴となる髪、眼差しを通して、男性は性的欲望をかきたてられ、その恋愛感情を受け取る女性は、恥じらいを示すという構図が出来上がっている。フィリスの身体は見せられる受動であると同時に、見せる能動である。フィリスには、彼女の思い込みを生む原因となる彼の視線が投げかけられている。それをポールは次のように語る。

He began to draw, looking intently at Phillis; I could see this stare of his discomposed her - her colour came and went, her breath quickened with the consciousness of her regard; at last, when he said, 'Please look at me for a minute or two, I want to get in the eyes,' she looked at him, quivered, and suddenly got up and left the room. (272)

フィリスの自我は、ホールズワースの目に映る視線に絡み取られたので、彼女は彼の目を見つめる。だが、好意を寄せる相手の視線が送り返されることによって、フィリスは欲望の感覚的な領域に入ることを恐れたから、彼女は身震いし、その場を逃れたのである。ホールズワースの方はといえば、彼も何も言わずに筆を進めているが、彼の沈黙は'unnatural'であり、彼の表情は変わり、'his dark cheek blanched a little.' (272) となっている。フィリスに生起する微妙な波動を、彼は確かに掴んでいる。言葉を交わすのではなく、目を見交わすことによって両者のエロスの関係が出来上がっている。

愛を性から分離しようとしたキリスト教文化の中で、ヴィクトリア朝の女性は、身体的条件に規定された受動性の中に押し込められている。この「女らしさ」という価値観をフィリス自身内面化しているからこそ、彼女は自分の恋心をひたすら隠し、それを知るポールに口外しないように頼む。また、ホールズワースは、フィリスの並々ならぬ教養よりもむしろ、自己をどこかで譲り渡し無化してしま

う彼女の従順さや繊細さに惹かれている。フィリスの物静かさ (her high tranquility) と混じりけのない無垢 (her pure innocence) が、ホールズワースは好きなのである (276)。換言すれば、ホールズワースはフィリスの外的な美質を高く評価しているのであって、彼の愛情は、フィリスの精神的な価値を深く認識したことから生まれたものではない。その結果、ホールズワースは自分自身のキャリア向上のために、そっけなくフェリスから離れ、カナダへ渡る。そこで、彼は何の躊躇いもなく、カナダ人の女性と結婚をする。それは、結婚適齢期という人生最大の転機の入りに立つフィリスにとって、身体のバランスを崩すほどショックな出来事である。正常な機能を失ってしまうフィリスの身体について、次章でさらに詳しく探ってみよう。

フィリスの病

ホールズワースの旅立ちによってフィリスの無力感は強まり、それを教養ある彼女といえども制御できていない。最終的に、彼女は脳膜炎の発作を起こし昏睡状態に陥る。この病に至るまで、彼女の身体は二回にわたって合図を出している。第一段階では、ポールがホールズワースの急なカナダ行きをフィリスたちに告げた後である。フィリスは必死に心の動揺を隠しているが、顔は青白い。それを話した翌日も、‘She was as pale as could be, like one who has received some shock’ (278) という状況である。ポールが次に会った十一月にも、フィリスは青ざめて疲れた顔つきである。十二月のクリスマス近くになると、フィリスは痩せて風邪が長引いている。フィリスは普段どおりに振舞おうとしているが、ポールは ‘Her grey eyes looked hollow and sad; her complexion was of a dead white.’ (282) と、はっきりと彼女の元気のなさを心に留めている。ある日、体調が思わしくないフィリスを心配していたポールは、フィリスがホールズワースの書き込みがある本を手にしてすすり泣いているのを目撃する。その時、彼は “Could that be the cause of her white looks, her weary eyes, her wasted figure, her struggling sobs?” (283) と自問する。そして、ポールは、フィリスを慰めるつもりで、ホールズワースはフィリスへの想いを残してカナダへ旅立ったと告げる。ポールの話には、ホールズワースは帰国すると、愛するフィリスを妻にするという未来への観測が含まれている。ポールにとって、フィリスは主体性を確立して

いく途中にある若者ではなく、保護すべき、か弱い子供となっている。なぜならば、自然の摂理が女性に予定したキャリアとは、結婚して母となる以外の何物でもないという文化の厚い外皮にまとわれた女性は、戦争、災害、不況、疫病といった厳しい現実と戦うのではなく、父や夫に守られて従順でありさえすればよい。ポールも無意識のうちに、乙女フィリスに余計なことを知らせないで、そっとしておくのがよいという考えを抱いている。ポールの心地よい話によって、フィリスはすっかり元気になる。復活祭に礼拝に行くと、ポールはフィリスが美しくなったという噂を耳にし(287) 実際に生き生きとしているフィリスに会う。

第二段階では、再びフィリスは身体の変調をきたし、ついには病いの床に臥せ意識不明になる。ポールはホールズワースからの手紙で彼の結婚を知る。彼はフィリスに大きな期待を持たせたことを後悔し、自責の念に苛まれながらも、フィリスにその手紙を見せる。フィリスは自分の感情を押し殺そうとするが、すでに平常心を失っている。ポールはその様子を、次のように言う。

I was worse than sure, — I was wretchedly anxious about Phillis. Ever since that day of the thunderstorm there had been a new, sharp, discordant sound to me in her voice, a sort of jangle in her tone; and her restless eyes had no quietness in them; and her colour came and went without a cause that I could find out. (296)

その後、フィリスは苦悩の余り気絶してしまう。このひどい状態になる直前に、父親ホールマン牧師の無理解が、フィリスの心を傷つけていることに注目しなければならない。ホールマン牧師は豊かな教養の持ち主として描かれているにもかかわらず、ホールズワースやポールと同様に、自主性を備えた一人の人間としてフィリスを見ていない。要するに、フィリスの悲劇は、Lansburyの指摘からも明らかだが、「誰一人として、一人の若い女性を“魔法にかけない目”(unenchanting eye)で見ようとしなかったことなのである。」⁹に尽きる。ホールマン牧師はポールから事情を聞くと、身軽に気持ちを変えるホールズワースの言葉を、そのままフィリスに伝えたポールの思慮のなさを非難する。また、フィリスがホールズワースに恋心を抱いていたことを、父親のホールマンは咎める。

この理由については、かなりの説明が必要となる。性道徳を踏み外した女性に対するヴィクトリア朝社会の制裁が、どれほど峻烈であるかを考えてみるとよい。男性に誘惑された後、捨てられた女には、売春か、海外移住か、死しか残されていなかった時代である。男が女を選ぶのと、女が男を選ぶのとは同じではない。男は女を性的対象として選ぶが、女が男を性的対象として選ぶにはよほど豊かな性体験の裏付けがないと難しい。当時の常識では、女性から性愛を口に出すことはありえないのである。さらに、キリスト教の牧師は、倫理的で精神的な愛の賛美をするが、それを異教的で官能的なエロスの謳歌にとって代えはしない。

ホールズワースの言う、「眠れる美女」(the Sleeping Beauty) という物語の空間に囲い込まれて、フィリスは静寂な世界に入るのが自然なのである。美しい姫が長い眠りから、素敵王子の接吻によって目を覚ますように、フィリスは従順に家庭に引きこもり、ただ待つだけでよいのだ。ところが、フィリス本人が父親に向かって、はっきりと “ I loved him, father! ” (308) と言う。続いてすぐに、父親は「彼がお前に愛を告白したのか。」と尋ねる。フィリスの答えは、 ‘ Never ’ である。これをより分かり易く把握するために、Wright の説明を持ってこよう。彼は、「この告白で、女性は男性からプロポーズされるのを待つのだという常識がひっくり返されている。つまり、女性側が積極的になっている。」¹⁰ と述べる。父親は、“ Phillis! Did we not make you happy here? Have we not loved you enough? ” (308) とフィリスを叱責する。続けて、彼は “ And yet you would have left us, left your home, left your father and your mother, and gone away with this stranger, wandering over the world. ” (309) と、そのやり切れない思いをフィリスに投げつける。彼は行き過ぎた競争世界からの避難場所、平和と秩序が保たれているホープ農園から飛び立とうとするフィリスの節度のなさに落胆するのである。牧歌的な田舎生活と両親の元を離れて、せせこましい実利と打算に満ちた社会の中で動き回り、一定の暮らしができない他人との結婚を、フィリスはどうして夢見るのか、父親には理解できない。フィリスの方は、自分の思いや願望と、父親が要求する行動との間の心理的な葛藤で、彼女の神経は耐え難くなっている。彼女の精神的ストレスは極度に達し、彼女の身体が異常をきたすのは時間の問題であったと言える。

最後まで、フィリスは精力を取り戻さないが、脳膜炎からは回復する。フィリ

スの言葉で終えられる。最後の “ We will go back to the peace of the old days ” (317) で表されている解決法、すなわち思考方法や場所を変えて健康を取り戻すという考えは、Vrettos によれば、「多くの十九世紀に出された健康マニュアルと一致している。」¹¹ のである。その意味では、平凡な結論であろう。しかし、フィリスが目覚めるきっかけは、この小説の知的な登場人物たちの言説ではなく、知識を学ぶために必要な書き言葉を持っていない召し使いの話し言葉に求めることで、作者は当時の社会の有り様に一石を投じる。以下、フィリスの身体の回復への道のりを論じてみたい。

身体の回復

フィリスの病は、単なる疫病ではない。心因性の要素が非常に強いので、父親は昔、彼女が欲しがっていた青リボンを持ってくる (316)。一方、母親はフィリスが好んで読んでいたラテン語やイタリア語の本を運んでくる (316) のだ。しかし、父親ばかりでなく母親も、フィリスに病を克服できるだけの力を与えることはできない。母親のホールマン夫人は、夫の公的名誉が保持されるように忠実に家の仕事に励んでいる。それは、母親も父親と同様に、男性の特権と女性のか弱さを当然のこととして認め、かつその子をその思想に即して育てていることになる。フィリスの危機対応能力や自立能力を強めるのは、慣行規則に順応する中産階級の母親ではなく、社会の周縁に位置する「他者」、家事使用人のベティなのである。彼女が権力と地肌でふれることを通じて獲得してきた経験の蓄積は、決して低く見積もってはならない。なぜならば、フィリスのボディ・ラングエッジを受け取ったのはベティである。「頭」偏重のテクノロジー社会で生きるポールの論理には、性の神秘と生命の威厳が欠落していると、ベティは感じている。それは、ポールがホールズワースの行動を正当化しようとした時に顕著に現れている。ホールズワースはフィリスと何の約束も取り決めも交わしていないと、ポールは言い立てる。彼は “ I don't believe Holdsworth ever spoke a word of love to her in all his life. I am sure he didn't. ” (298) とベティに抗議する。ポールの言い分では、ホールズワースはフィリスに一言も愛という言葉をしやべってはいないのだから、彼に拘束力は求められない。それに対して、ベティは ‘ Aye, Aye! But there's eyes, and there's hands, as well as tongues; and a man

has two o'th' one and but one o' t' other.' (298) と応える。この彼女の方言は、「そうそう！口と同じように目もあり、手もある。そして、男というものは、口は一つだが、目と手は二つも持っているものだ。」と置き換えることができる。まなざし、頬、手つき、声、表情などの実にわずかなホールズワースの変容をフィリスは感知して、未知の官能的な世界に引き込まれたとベティは言いたいのである。都会的な合理性に縛られたポールは、身体感覚を忘れていたので、こういった微妙な関係を察知できない。

男女の身体を取り巻く複雑で繊細な文化装置で、男は女に結婚をしようと口説けることが、ベティには分かっている。テキスト上では説明されていないが、ここで分かりやすく問題を分析すると、次のようになる。人間は、言語を持っているからこそ、難問も共有できて相互に他者を理解できる。しかし、言語だけで共感が成立するとは限らない。言葉を交わし合うことこそが、かえってしばしば誤解や無理解の種にもなったりもする。言語表現の周辺に、多くの身体的な表現が張り巡らされていることを感じ取ることによって、初めてその言葉の言わんとするところへの、より良い正確な理解に達することがある。

この言い分に対して、ポールは面白くない。一つには、言われた相手が自らと対極の位置にある、粗野な自然と労働者階級の世界の体現者、ベティであるからだ。もう一つは、年齢が低いために、労働者階級からへつらわれなかったことである。彼は “A lad of nineteen or twenty is not flattered by such an outspoken opinion even from the oldest and ugliest of her sex; . . .” (299-300) と言う。中産階級の人々が、召使いの集団に関わる過度に一般化、単純化されたイメージで、召使いを劣性とみなしているとすれば、ポールもその例外ではない。「年寄りで全く醜い女」からもお世辞を言われないと、ポールは不満げである。といっても、彼は自己の社会的権威をふりかざすような人間ではない。当時の人びとと同じ感覚で、彼はベティに自分の「身体」を使い生活費を稼ぐ、雇われ人という座しか与えていないのである。召使いという身分とそれにつきまとう途方もない労役は、言うまでもない。 *What Jane Austen ate and Charles Dickens knew* で、十九世紀イングランドの生活史をのぞいてみよう。当時の標準的な女中の生活は過酷である。家事使用人は朝の6時から働いて、夜11時になるまで、絶え間なく用事を言いつけられている。ヴィクトリア朝中期の時代で、1年に£11から£14とい

う低賃金である。しかも、1年で14日間しか休みはない。その中の日曜は、半日の休みである。1週間のうち1日だけ、夜が休みに、1カ月で1日だけ、昼が休みである。居住地は、夏はうだるように暑く、冬は凍るような屋根裏部屋である、¹²といった具合である。この小説におけるベティの場合は、どうであろうか。彼女は夜の礼拝中、がっしりとした腕に疲れ果てた頭を乗せて、ぐっすりと居眠りをするという習慣が身についている(239)。彼女の身体機能は‘stalwart arms’という身体的な特徴が示しているように、鍛え上げられたものである。「礼拝中の眠り」において、教義よりも労働というベティの現実性、彼女の身体的、動的な要素が強調される。

さらに論考を深めたいのは、ベティの洞察力の鋭さである。ベティは、ポールが観察しているように、尊敬している人間に対してさえもお世辞を言わない。標準的ではなく、地方言語の範囲内で沈黙を強いられた社会的下位の女性であれば、抵抗せずに同意する追従的な共犯によって生み出される弱さを持っているはずである。彼女にはなぜ、その弱さが見受けられないのだろうか。これに迫るには、彼女は独立教会派(Independent)の牧師をしながら、農業をも営むホールマン牧師を中心とするホープ農場という共同体の一員である、ということが大変に重要である。牧師は、弱い者や依存的な者やドロップアウトした者に対する関心や配慮を失っていない。ホールマン牧師は人々の生存権を守ることを最優先課題にするので、効率よく仕事をし、その運営に当たることができないTimothy Cooperを、別の身体と取り替え、それで良しとしていない。彼は人間を利用価値だけで計り、不必要な人間を見捨てることに良心の呵責を覚えるからである。端的に言えば、ホールマンは集团的、相互主体的な共生のかたちを保証する共同体を形成している。この農場は、大英帝国の国益の増大に伴った功利主義を導入していない「無垢なるエデンの園」¹³なのである。

ところが、物語の後半において、ホールマン牧師の態度が一変する。彼がメンバーに支配的な言動を取った時、彼から怒り以外の感情、すなわち喜びや悲しみや他者との共感失われる。それは、雇い主ホールマンが冷淡にも、ティモシーを共同体から切り離すということで現れる。確かに、のろまなティモシーを一掃すれば、計算上では仕事は数倍はかどるだろう。しかし、ギヤスケルはティモシーによる情緒的な表現を提示することによって、非共感的な利益至上主義に疑問

を呈する。解雇されたにもかかわらず、ティモシーは、荷馬車の騒音がフィリス・ホールマンの休息を妨げないように、彼はホープ農園に入る荷馬車を制限し、長い夏の日中、橋の袂で見張りをしている（106-107）。ホールマン家の娘フィリスの容態の悪化を真摯に受け止め、速やかな回復を切に祈ったティモシーの行動には、情け深さと思いやりがある。それを知ったホールマン牧師は自らの過ちに気づき、ティモシーを再雇用し、彼の能力に適した仕事をあてがう。温情のあるホープ農場は、思い思いの欲望に支配されない、ほどよい満足を共に分かち合う共同体として、生き残る可能性が示唆されているのである。こうした議論からも、明らかに、ベティの身体能力はよい権力関係と結びついている。彼女は何の喜びもない空虚な労役を課せられているのではなく、「働く身体」で主体的に生きていくと言える。

結び

ベティはフィリスを励まして、彼女は次のように述べる。

' Now, Phillis!' said she, coming up to the sofa; 'we ha' done a' we can for you, and th' doctors has done a' they can for you, and I think the Lord has done a' He can for you, and more than you deserve, too, if you don't do something for yourself. . . ' (316)

やれるだけのことはやったので、後は自分自身で何かをするようにと、ベティはフィリスを行動へと促す。このベティの土着の言葉にフィリスが耳を傾けた時、彼女の意識は戻る。ベティはフィリスとは全く異なる次元に住んでいる。好条件の結婚相手に見初められ、賛美され、言い寄られ、そして所有されるという受身の存在となって、働く必要もなく暇を持て余した女性の枠組みにベティは組み込まれていない。想像力によってしか、居心地が良い生活を送れる階級の人々の気持ちは彼女には分からない。つまり、フィリスを幼児期から世話したという愛情関係で、彼女はフィリスの失意と屈辱の大きさの計り知れなさを理解したのである。それは、他者との共感的なコミュニケーションの力と言える。人間の語りの背後に、他者への共感がない限り、他者への関係性は見直されないのである。つ

まり、すべての人間は深く互いに関連しているので、お互いに認め合い、信頼し合うべきだとする作者のメッセージがここには隠されている。

何人かの批評家たち¹⁴は、『フィリス』の当初の結末はこのようではなかったことを主張している。『フィリス』は雑誌の編集者の都合では打ち切られたのであって、ギヤスケルはさらに続けたプロットを用意していた。ギヤスケルが想像し思い巡らせたのは、幸せな結婚生活を送るフィリスではない。フィリスが思いを寄せた鉄道技師のホールズワースを凌ぐ相手と結ばれたことが、最後に付け加えられてはいない。フィリスは父親の死後、病の母親を抱え、二人の孤児を養子に迎えて、ホープ農場を管理する。彼女は、村の湿地帯の水準測定をして、土地が均一になるように、排水事業に精を出しているのだ。意思決定の責任はフィリスの「身体」に集中している。しかも、女性の居場所である家庭での生活を大事にし、病人への介護、奉仕に明け暮れながらも、フィリスは公的領域へも進出している。彼女は自然を人間のための存在とみて、自然を支配し改造することによって、大きな力を発揮しようとしている。フィリスの教養の限界は、ここでは描かれていない。従って、フィリスの教養は、構造として身体化されることによって、その限りで現実的な働きとなることが分かる。その背後には、労働者階級の不安の原因を見よう、調べようとするよりも、貧困者を怠惰だと非難するほうが、簡単に心地よいという事実を把握しているギヤスケルが潜んでいる。知的職業の小説家ギヤスケルが、瑣末で単調な家庭生活での体験を経て得た実感とは、言語を超えた身体性がいかに重要であるか、ということであったに相違ない。それゆえに、『フィリス』では身体から独立した崇高な魂を獲得するという理想的観念は排除されている。そこに浮上するのは、主体を確立する上で精神と肉体が相関的に働き、発達することを積極的に評価しようとする意思なのである。

本論はディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ギaskell協会 合同大会（2004年10月3日、於大手前大学）で行った口頭発表「*Cousin Phillis*における身体と言語」に、加筆修正を施したものである。発表を行った際に、有益なご指摘、ご教示を頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。

註

1. Winifred Gerin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1976) 237.
2. Donald D. Stone, *The Romantic Impulse in Victorian Fiction* (Cambridge: Harvard UP, 1980) 166.
3. A. W. Ward, ed., *The Works of Mrs. Gaskell* vol. 7. (New York: AMS edition, 1972) xvii.
4. Marianne Camus, *Women's Voices in The Fiction of Elizabeth Gaskell (1810-1865)* Women's Studies vol. 39. (New York: The Edwin Mellen Press, 2002) 31.
5. Elizabeth Gaskell, "Cousin Phillis," in *Cranford/Cousin Phillis*, ed. Peter Keating (Harmondsworth Penguin Books, 1978) 255. 以下この作品への言及はこの版に拠り、引用頁数は本文中に挿入する。なお、訳文はすべて拙訳である。
6. Elizabeth Jean Sabiston, "Anglo-American Connections: Elizabeth Gaskell, Harriet Beecher Stowe and the "Iron of slavery" in *The Discourse of Slavery* (London and New York: Routledge, 1994) 113.
7. Philip Rogers, "The Education of Cousin Phillis." *Nineteenth-Century Literature*. 50 (1995): 29. さらに、Rogersはフィリスの父親は亡くした息子の代わりに、フィリスにラテン語とギリシア語を教えたと指摘する。
8. Patsy Stoneman, *Elizabeth Gaskell* (Brighton: The Harvester Press, 1987) 162.
9. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell* (Boston: Twayne Publishers, 1984) 52.
10. Terence Wright, *Elizabeth Gaskell: 'We are not angels' Realism, Gender, Values* (London: Macmillan, 1995) 308.
11. Athena Vrettos, *Somatic Fictions: Imagining Illness in Victorian Culture* (Stanford: Stanford UP., 1995) 38.
12. Daniel Pool, *What Jane Austen ate and Charles Dickens knew: From fox Hunting to Whist—the Facts of Daily Life in 19th-Century England* (New York: Simon & Schuster, 1993) 221. その他、19世紀の召使の生活に関しては、クリスティン・

ヒューズ『十九世紀イギリスの日常生活』（植松靖夫訳、松柏社、1999年）48-59頁を参照。

13. John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (Frontwell: Linden Press, 1970) 438.
14. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993) 551; Linda K. Hughes and Michael Lund, *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work* (Charlottesville and London: UP of Virginia, 1999) 161-162; John Chapple & Alan Shelston ed., *Further Letters of Mrs Gaskell* (Manchester & New York: Manchester UP, 2000) 259-260.